



水の街、ラゴス… 時々晴れ

丸紅ナイジェリア会社 大野 祐一

いたような風景が広がっている。
セキュリティーに守られたわが家の鉄の扉を車で出ると待ち受けているのは渋滞。わずか五〇〇メートル先にあるファラモ橋まで一時間かかることすらある。橋の先にあるラゴスの中心地ヴィクトリア・アイランドを誰もが目指す。幾本もの美しい橋のかかる先進国の川景色なんて夢のように遠い。
ひしめき合う車、その合間を縫うバイクタクシー、さらにはわずか数センチの



友人ご夫妻と一緒に。左が筆者

カラフルな民族衣装を着た人々が行き交う国、ナイジェリア。二〇〇〇以上の部族の集合体。人口一・六億人。アフリカ最大の産油国。私たちの暮らすラゴスは大西洋に面した商業都市だ。季節は常夏。地上にはハイビスカスやブーゲンビリアが咲き乱れ、椰子の葉が海風に揺れる…と聞くと、美しい楽園都市を思い浮かべるが、現実には喧騒と混沌に満ちたアフリカの苦悩を描いたような風景が広がっている。

夜には道端の店々に灯油ランプの灯りが揺れる。真つ暗闇にそれはロマンティックではあるけれど、今夜も電気が来ていないのだ。停電は日常茶飯事。雨が降れば道にはバケツをひっくり返したように水が溜まる。
街ではよく道端で昼寝をしている人を見かける。暑い日盛り



友人と一緒に誕生日を祝う

隙間を歩く物乞いや物売り。野菜、お菓子、パジャマ、柱時計、帽子。歩くコンビニさながら、何だつて売っている。彼らにとつては渋滞がなくては商売も始まらない。うまくできているな…と感心して眺めていると、買うのかと思われいつまでも付いてくる。ラゴスでは窓を開けて車を走らせたことはない。それどころか外を歩いたことすらない。最近軒並みレストランが武装強盗に襲われているので、夜の外出もままならない。



写真上) どこでもダンス!
写真右) 南国の風景



の木陰でそれは心地よさそうに。穏やかなクリークには小舟で投網をするのどやかな風景も目にする。昔ながらの彼らの静かな生活を見るようで胸が痛む。富と貧、原始と現代が身近でせめぎ合い混沌としているラゴス。
それでもナイジェリア人の心の幸福度はとても高いと聞く。わが家のコック、敬虔なクリスチャンであるジョシユアの口癖は、「神が力を与えてくれるから」だ。そんな彼の得意料理は皮から作る餃子やコロッケ。それをつまみに数少ない日本人駐在員の人々と盛り上がるのが最もほっとするラゴスの夜。一瞬の安らぎの中、気分は「時々晴れ」。